

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12868

研究課題名(和文)ステファヌ・マラルメに関する生成論的研究

研究課題名(英文)Textual Genetic Study of Literary Manuscripts by Stephane Mallarme

研究代表者

宮崎 克裕 (Miyazaki, Katsuhiro)

同志社大学・グローバル地域文化学部・助教

研究者番号：00411075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、マラルメの『半獣神の午後』と『イジチュール』の自筆草稿を、主としてポリフォニー言語理論の見地から、テキスト生成論的アプローチを用いることによって分析し、両作品の生成プロセスを解明しようとする試みである。この研究の結果、われわれは両作品のテキスト生成プロセスにおけるディスクール構造化のポリフォニック側面を解明した。同時に、われわれは国内外で初めて、両作品の草稿のディプロマティック版による翻刻を行なった。

研究成果の概要(英文)：We have, in this study, attempted to analyse the manuscripts of Mallarme's "L'Après-midi d'un faune" and "Igitur ou la folie d'Elbehnon", by adopting the linguistic polyphony theory of Oswald Ducrot and La Scaploline as the main conceptual tool for understanding the textual genetic processes of these works. Through these analyses, we have been able to elucidate the polyphonic textualisation in these discursive structuration processes. We have also produced diplomatic editions of these manuscripts, based upon these text-genetic analyses

研究分野：フランス文学

キーワード：マラルメ 半獣神の午後 イジチュール 発話行為 ポリフォニー ナラトロジー テキスト生成論
ダイクシス

1. 研究開始当初の背景

本研究課題「ステファヌ・マラルメに関する生成論的研究」に着手した当初、次のような二つの背景があった。

一つには、それまでのマラルメ研究において、厳密な意味でのテキスト生成論の立場からの草稿分析が行われてこなかったという背景である。マラルメ研究はこれまで、1961年のJ.=P.リシャルによる『マラルメの想像的宇宙』と1988年のB.マルシャルによる『マラルメの宗教』という二つの劃期的研究によって、この詩人の錯綜した想像世界や、難解な宗教思想の解明において瞠目すべき成果を挙げてきた。

しかし、J.シェレールによるマラルメの『書物』草稿群の解読と、G.デイヴィスによる『エロディヤードの婚姻』の草稿解読を除き、緻密な草稿分析に基づくマラルメの主要作品の研究は依然として進んではいなかった。さらに、プルス研究やフローベール研究において劃期的な成果を挙げてきたテキスト生成論の立場からの研究は、マラルメ研究では皆無であった。換言すれば、テキスト生成論の立場からのマラルメ研究は、プルス研究やフローベール研究と比べて、遅れていたどころか、全く存在しなかったのである。

とりわけ『エロディヤード』や『骰子一擲』と並び、自筆草稿が比較的多く保存されている『半獣神の午後』と『イジチュール』は、1998年にパリ第4大学教授B・マルシャルによって、世界で初めて草稿の転写版が発表されたにもかかわらず、両作品の草稿のミクロ・レベルでの生成研究はなされなかった。そして、後述するように、その遠因の一つとして考えられたのが、マルシャルによる草稿の転写法に内在する問題である。

もう一つの背景は、テキスト生成論という文学研究の方法論自体に関わる。1970年代以降、とりわけプルスとフローベールの草稿研究において重要な方法論となったこの生成論は、決定稿と草稿との階層秩序を解体し、両者のエクリチュールの「揺らぎ」の狭間に切り開かれる力動的なテキスト空間の中で、作品の文学性を捉えようとした点では、確かに劃期的な方法論であった。しかし、すでに松澤和宏が『生成論の探求』のなかで指摘していたように、従来の生成研究には、草稿を決定稿から逆照射することで事後的にテキストの生成プロセスを捉えようとする方法論的矛盾が内在していた。

2. 研究の目的

前述の二つの背景から、次のような重要な課題が浮上した。

前述したように、『半獣神の午後』と『イジチュール』の草稿に関しては、1998年に刊行されたガリマール社のマルシャル校訂版『新版マラルメ全集』第1巻のなかですでに、その転写が発表されていた。しかし、マルシャルによるその草稿の転写方法には、ある深

刻な問題が内在していた。

マルシャルがこの『新版マラルメ全集』第1巻で、草稿の厳密な解読を通して網羅的な転写を行っていたことは疑いを得ない。しかし、そのマルシャルの転写では、テキスト生成論者P=M・ド・ピアジが言うところの「線状化転写」(transcription linéarisée)が採用されていたために、紙葉上の加筆修正された語句相互の空間的配置が、すべて線状的な行へと還元されていたのである。このため、マルシャルの転写では、草稿におけるテキストの語句レベルでの時系列的変容プロセスがほとんど把握できなかった。つまり、抹消されたり、加筆されたり、修正されたりした語句相互の空間的配置を根拠にして、ミクロ・レベルでのエクリチュールの時系列的な運動を記述することが、マルシャルの転写では全く不可能であることが判明したのである。

この結果、本研究を遂行するには、まず、両作品の自筆草稿を所蔵しているパリ第4大学附属ジャック・ドゥーセ文学図書館に赴き、そこで『半獣神』および『イジチュール』の自筆草稿を綿密に調査し、マルシャルの採用した「線状化転写」ではなく、ディプロマティック版による草稿翻刻を試みる必要性が発生した。これが第一の課題である。

第二の課題は、『半獣神』草稿と『イジチュール』草稿の分析において採用する方法論に関わるものである。

『半獣神の午後』として現在知られるマラルメの韻文詩篇は当初、1866年にパリ・フランス座での上演を目的として、韻文形式の劇詩として執筆されたものである。この初期段階のテキストは、二人の「水の精(ニンフ)」たちの対話場面と半獣神の独白の場面から構成されていた。しかしこの劇詩がフランス座査読委員会によって採用を却下された後、マラルメは最終的に、この作品を半獣神だけが一人称単数で語る独白形式に改変している。

他方、短篇『イジチュール』は、『半獣神』着手の3年後に、マラルメが当時、己の精神の「危機」を克服するために、「同毒療法」として制作し、最終的には未完のまま放置したものである。この『イジチュール』草稿群のうち、ドゥーセ文学図書館で現在、「下書き」として分類されている8葉の草稿(第12葉・表、第13葉・表、第14葉・表、第15葉・表、第16葉・表、第17葉・表、第18葉・表、第20葉・表)は、主人公イジチュールが語り手として登場し、一人称で語る独白形式となっている。

ところで、『半獣神』草稿群と、制作時期がそれほど隔たっていない上記8葉の『イジチュール』草稿群には、語り手の発話行為の形式にある共通する特徴が認められる。それは、己の分身を対話者にしながら語り手が語るディスクールが、あたかも合せ鏡の鏡面に無限に増殖する自己像のごとく、際限もなく反映しあい、交錯し、その結果、一体、

どの私 が語っているのか判然としなくなる特異な「独白」である。しかも、両作品の草稿群のなかでも、マラルメはとりわけこれらの「独白」形式で書かれた草稿に、夥しい数の加筆修正を繰り返し行なっている点も共通しており、ある意味で、マラルメは作品世界の主題面での改変以外に、テキストの語り方、すなわち、発話行為の改変にも多大の関心があったことが推察される。

したがって、これらの『半獣神』草稿や『イジチュール』の上記8葉の草稿に見られるように、語り手=話者が自己自身を対話者として語り、その対話者が今度は語り手=話者として1人称単数で語ることを果てしなく反復するような発話行為を分析し、厳密に記述していくには、テキストにおける発話行為を理論的に考察する「概念道具」が不可欠となった。これが第二の課題である。

ところで、1980年代以降のフランスでは、システムとしての「言語」(langue)を重視するソシール言語学に依拠した構造主義の衰退とともに、具体的なコミュニケーションの状況における「言行為」(parole)や「発話行為」(énonciation)を重視するE.バンヴェニストの言語論が再評価されるようになった。それと平行して、1970年代以降、英米圏のJ.L.オースティンやJ.サール等による言行為論がフランスに積極的に移植された。そのような歴史的状况のなかで、フランス人言語学者O.デュクロが1984年に、ロシア人言語哲学者バフチンのポリフォニー概念を、発話行為論の観点から独自に理論化を試みた。こうして、1990年代以降、フランス言語学の領域で一挙に新たな理論モデルが次々と構築され、それが2000年代から、フランス文体論の領域での理論的深化に多大な影響を与えることになった。

このように新たな発展を遂げた発話行為論のなかでも、とりわけデュクロのポリフォニー理論と、その弟子ノルケを中心とするスカンジナビア系ポリフォニー言語学派(以下、「スカポ言語学派」と略記)によって精緻化されたポリフォニー概念は、人間の言語活動における発話行為レベルでのさまざまな「話者の審級」(instance locutrice)を厳密な定義によって分類し、概念化した点では、G.ジュネットのナラトロジーの陥穽を補完する劃期的な言語理論であり、日常言語のみならず、文学テキストの領域においても、発話行為レベルでのエクリチュールの動態性を捉える上できわめて有効な「概念装置」であることは疑いない。

以上の理由から、本研究では、『半獣神』および『イジチュール』草稿群の生成論的分析に、このようなデュクロ=スカポ言語学派によるポリフォニー理論を応用することにした。このポリフォニー理論の生成論への適用によって、両作品のテキストの発話行為レベルでのテキスト生成プロセスが最も効果

的な仕方では解明され、その結果、独白という一種の「内的ディスクール」に関するマラルメの文学手法の新たな側面が浮き彫りになることが考えられたからである。

また、このような方法論によってマラルメの「内的ディスクール」の特性が解明された場合、それが、マラルメの弟子E.デュジャルダンの「内的独白」に与えた影響や、さらには20世紀初頭のジョイスの「意識の流れ」や第二次大戦後のヌーヴォー・ロマンの作家たちの「自由直接話法」との類縁関係の研究へと大きく発展していく可能性も予想された。その結果、本研究が、ヨーロッパ文学という大きな歴史の流れにおいて、マラルメからデュジャルダンを経由してジョイスやロブ=グリエへと至る、これまで指摘されることのなかった文学手法上の新たな「鉅脈」の発見へと発展しうることが十分に予想された。

本研究は、以上の二つの課題を解明していくことを主たる目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、上述のように、マラルメの『半獣神』と『イジチュール』の草稿調査を実施し、草稿のディプロマティック版による翻刻を国内外で初めて試みるとともに、デュクロ=スカポ言語学派によるポリフォニー理論を用いて草稿を解析し、両作品の発話行為レベルにおけるテキスト生成プロセスを解明することを目的とした。

このため、『半獣神の午後』と『イジチュール』に関する先行研究の検討は無論、テキスト生成論・発話行為論・ポリフォニー理論・文体論に関連した文献を可能な限り網羅的に収集し、理論的に検討すると同時に、パリのジャック・ドゥーセ文学図書館での草稿調査が不可欠となった。

本研究最終年度は、2年間にわたって作成した『半獣神』草稿と『イジチュール』草稿のディプロマティック版翻刻に註釈を付して紙媒体での刊行の準備をしながら、同時に上述の草稿分析の結果を学会や研究会で発表することが研究活動の中心となった。

以下、平成27年度から平成29年度までの研究期間中に実施した研究方法を時系列に簡潔に記す。

I. 平成27年度

平成27年度の本研究は、次の三つの時期に区分し、それぞれの目的に従って研究を実施した。

(1) テキスト生成論に関する古典的文献の再検討と発話行為論・文体論の主要概念の分類・整理(平成27年4月~10月)

(2) パリのJ.ドゥーセ文学図書館でのマラルメ『半獣神』草稿調査(平成27年11月の所属先研究機関の学園祭休暇中)

(3) 『半獣神』草稿群の生成論的ポリフォニー分析(平成27年10月~平成28年3月)

II. 平成28年度

平成 28 年度の研究も主として、次の三つの時期に区分して実施した。

- (1) テクスト生成論とポリフォニー理論の融合可能性の模索(平成 28 年 4 月~8 月)
- (2) パリ・J.ドゥーセ文学図書館でのマラルメ『イジチュール』草稿調査(平成 28 年 9 月の所属先研究機関の夏期休暇中)
- (3) 『イジチュール』草稿群の生成論的ポリフォニー分析(平成 28 年 10 月~平成 29 年 3 月)

III. 平成 29 年度

- (1) 『半獣神』と『イジチュール』草稿のディプロマティック版による翻刻の見直し作業と註釈の執筆、および紙媒体での公開準備。
- (2) 上記草稿分析の結果の発表の準備と論文執筆。
- (3) 平成 27 年度から継続してきたテキスト生成論の理論的再検討とポリフォニー理論の生成研究への応用可能性に関する論文の執筆。

4. 研究成果

上述したように、平成 27 度から最終年度まで常に継続的に行わなければならなかった作業は、テキスト生成論の理論的再検討と、ポリフォニー言語理論に依拠した最近のフランス文体論の基本的な諸概念の整理と分類であった。とりわけ平成 27 年度と平成 28 年度の前半の半年間はこの作業を集中的に行ない、マラルメの生成論的研究への応用可能性を模索した。

テキスト生成論の理論的再検討に関しては、平成 27 年度はまずテキスト生成論の古典的文献を方法論的な観点から再検討し、その歴史的な意義と方法論上の問題とを考察した。特にこの最初の段階では、R.ドゥブレ=ジュネット、J.ネーフ、P.=M.ド・ピアジ、A.グレジヨン、吉川一義、吉田城、松澤和宏等の生成論研究が検討対象となった。

他方、フランスの言語理論・文体論の検討に関しては、まず第二次大戦後のフランスの言語理論史における大きな岐路を 1990 年に設定し、1990 年以前に刊行された古典的な発話行為理論・ポリフォニー理論・ナラトロジー関連の重要文献を批判的に検討し、理論モデルを分類・整理した。特にバンヴェニスト言語学、バフチンによる文学的ポリフォニー理論、デュクロの言語学的ポリフォニー理論の徹底的な読み直しから出発し、さらにノルケを中心とするスカボ言語学派のポリフォニー理論や、デュクロに批判的立場を取るケルブラ=オレッキオーニの「主観性の発話行為」論なども含め、伝統的に「話法」(discours rapporté)と呼ばれてきた直接話法・間接話法・自由間接話法や、転位語(embroyeur)、直示詞(déictique)、文脈指示詞(indéxicale)、視点(point de vue)などの語用論における諸概念の由来と定義をそれぞれ整理した。

平成 28 年度は、前年度から引き続き、主としてテキスト生成論の方法論としての理

論的再検討を行なった。この時期は、主として 1990 年代以降にフランス語圏で刊行された生成論研究を検討しながら、生成論と言語学モデルとの融合の可能性を検討した。

生成論に関しては、特に A.エルシュベール=ピエロ、E.マーティー、G.フィリップ、S.プティヨン等の言語学概念を応用した生成論研究が主たる検討対象となった。同時に、1990 年以降に提唱された新たな言語理論を参照しながら、主要学説の整理・分類を行なった。特に、ジュネットのナラトロジーにおける「焦点化」概念を批判し、新たな「視点」概念を創出した A.ラバテルによる相互行為論的ナラトロジーや、M.ボノムによるディスクールの譬喩形象の語用論的研究、J.デュレンマットや I.シルセ等による句読法の文体論的研究などが主な考察対象となった。

『半獣神』と『イジチュール』の自筆草稿の調査とディプロマティック版による翻刻に関しては、当初の計画通り、平成 27 年度と平成 28 年度の長期休暇を利用して、フランスのパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文学図書館まで赴き、草稿調査を実施した。その際には、『新版マラルメ全集』第 1 巻所収のマラルメの転写と、マラルメのオリジナル自筆草稿とを一字一句比較照合しながら、ディプロマティック版のための転写を行なった。また、マラルメの草稿解読とは別の解読が可能な場合や、明らかにマラルメの転写ミスと思われる箇所がある場合には独自の註釈を作成した。さらに、マラルメの線状型転写では完全に一元的な行へと還元されてしまった語句の加筆・修正の空間配置的關係を、自筆草稿にしたがって忠実に再現した。

『半獣神』と『イジチュール』の草稿に関する生成論的ポリフォニー分析は、草稿のディプロマティック版の作成がひと通り完了してから行なった。

『半獣神』に関しては、当初、作品内に挿入されていた二人の「水の精(ニンフ)」の対話場面が、テキストから完全に削除され、半獣神の回想に間接的に嵌入されていくエクリチュールの動態プロセスを、発話的審級の側面から考察し、そのプロセスにおけるポリフォニー的側面を剔抉した。

『イジチュール』草稿の分析に関しては、作成したディプロマティック版転写を参照しながら、とりわけ時制、冠詞、指示詞、人称、叙法などのダイクシスやモダリティに関するテキスト改変の言語的痕跡に着目し、その改変による「話者の審級」から、『イジチュール』草稿における発話行為の生成プロセスを考察した。

本研究最終年度は、過去 2 年間にわたって検討したテキスト生成論へのポリフォニー理論の応用の実践として、マラルメの詩篇「聖女」決定稿における指示詞を、初稿と比較しながらポリフォニー分析した研究を、平成 29 年 4 月に関西マラルメ研究会で口頭発

表した。また、その口頭発表を基にして、研究論文としてまとめ、平成 30 年 3 月、所属先研究機関の紀要『GR』に発表した。

さらに、平成 29 年 12 月に神戸大学で開催された「マラルメ・シンポジウム 2017」において、スカポ言語学派によるポリフォニー理論の立場から、マラルメ『骰子一擲』の詩的ディスクールにおける「発話的審級」とダイクシスを考察した発表も行なった。これを基にした研究論文は、平成 30 年秋に京都大学フランス語学フランス文学研究会篇『仏文研究』誌に掲載予定である。

なお、『イジチュール』草稿のディプロマティック版とその註釈、および、草稿分析の結果に関しても、上記『仏文研究』誌に発表予定である。

『半獣神』草稿の生成論的ポリフォニー分析の研究成果に関しては、平成 30 年 9 月に慶應義塾大学で開催されるマラルメ・シンポジウムで口頭発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

宮崎克裕、「マラルメにおけるイメージの動態性——詩篇「聖女」における指示詞の分析を中心に——」、『GR 同志社大学グローバル地域文化学会 紀要』、同志社大学グローバル地域文化学会、査読あり、第 10 号、2018 年 3 月、37-66 頁。

DOI: 10.14988/pa.2018.0000000104

〔学会発表〕(計 2 件)

宮崎克裕、「詩における発話行為と対象指示マラルメを中心に」(研究発表)、関西マラルメ研究会第 24 回研究発表会、京都大学人文科学研究所、2017 年 4 月 15 日。

宮崎克裕、「『骰子一擲』におけるポリフォニー——話者の痕跡を中心に」(研究発表)、「マラルメ・シンポジウム 2017 『ディヴァガシオン』出版・『暮の一振り』発表 120 周年」、神戸大学人文学研究科、2017 年 12 月 17 日。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮崎 克裕 (MIYAZAKI, Katsuhiko)

同志社大学・グローバル地域文化学部・助教

研究者番号: 00411075

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()